

第39回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 2008年9月9日（火）10：30～11：20

2. 場 所 中央合同庁舎4号館10階 1015会議室

3. 出席者 原子力委員会

近藤委員長、田中委員長代理、松田委員、広瀬委員、伊藤委員  
内閣府

土橋参事官、千葉参事官補佐、横尾参事官補佐

4. 議 題

（1）我が国のプルトニウム管理状況について

（2）アジア原子力協力フォーラム（FNC A）第2回アジアの原子力発電分野における協  
力に関する検討パネルの結果について

（3）その他

5. 配付資料

（ 1 ） 我が国のプルトニウム管理状況

（ 2 ） アジア原子力協力フォーラム（FNC A）第2回アジアの原子力発電分野に  
おける協力に関する検討パネル開催結果について（報告）

（ 3 ） 第36回原子力委員会定例会議議事録

## 6. 審議事項

(近藤委員長) おはようございます。第39回の原子力委員会定例会議を始めさせていただきます。

本日の議題は、一つが、我が国のプルトニウム管理状況について御報告を頂くこと。二つが、アジア原子力協力フォーラム(FNCA)第2回アジアの原子力発電分野における協力に関する検討パネルの結果について御報告を頂くこと。三つ、その他となっています。よろしくお願いいたします。

それでは、最初の議題からお願いいたします。

### (1) 我が国のプルトニウム管理状況について

(土橋参事官) それでは、最初の議題、我が国のプルトニウムの管理状況につきまして、千葉補佐より説明をさせていただきます。

(千葉補佐) では、資料第1号に基づきまして、我が国のプルトニウム管理状況について御説明させていただきます。

本件は、プルトニウムに関してその利用の透明性の向上を図ることにより、国内外の理解を得るという観点から、平成6年より毎年、我が国のプルトニウム管理状況を公表してきているものでございます。

本件は、平成19年末における我が国のプルトニウム管理状況を整理させていただいてございます。年度で整理しているのではなくて、歴年でこの数字を整理してございます。

平成19年末における状況を、2ページの別紙で整理させていただいてございます。ここで表しております数字につきましてはkg単位が基本で整理させていただいてございます。

平成18年から平成19年にかけてのプルトニウム管理状況の大きな違いとしましては、「(1) 国内に保管中の分離プルトニウム量」で、日本原燃株式会社の六ヶ所の再処理施設におけるプルトニウムの管理量、保管量ですけれども、これが平成18年から始まっておりますアクティブ試験が19年から本格化したことにより、使用済燃料の再処理量が増えことに伴いまして、回収されますプルトニウムの量が前年に比べて大きく増えていることが大きな特徴として挙げられます。

次に、3ページには昨年1年間の分離されたプルトニウムがどのように使われたかを整理した表になってございます。(1)が昨年1年間でそれぞれの再処理施設で回収された酸化

プルトニウム量を示してございます。上の数字が昨年平成19年の数字で、下の数字が平成18年。比較のために平成18年の数字を記載させていただいてございます。

次に、(2)に昨年1年間に燃料確保で使ったプルトニウムの量が51kgということで示させていただいております。

次に、燃料として確保されましたプルトニウムが実際に原子炉施設にどれだけ移されたかというのが(3)に記載させていただいてございます。こちらが23kgになってございます。

4ページからにつきましてはこれは参考資料ということで、一応平成19年におけます国内に保管されているプルトニウムの増減状況を表にしたものが4ページ、5ページに記載してございます。これをもう少し分かりやすくするために、比較の表を図にしたものが6ページにあります。こちらで簡単に御説明させていただきます。

この絵の真ん中で青く塗ってございます数字が国内合計で、これは昨年末の各施設におけますプルトニウムの合計の保管量でございます。これは昨年1年間のプルトニウムの数字になってございます。昨年1年間で原子炉施設等に貯蔵されたプルトニウムは1,352kg、再処理施設には3,407kg、加工施設には3,962kgのプルトニウムが保管されていることになっているということになります。

次に7ページですけれども、これはIAEAの条約により、昨年末時点において我が国にどれだけプルトニウムが保管されているのかをIAEAに報告することになっており、IAEAから示されております様式に基づいて整理したものでございます。この数字でIAEAには報告をすることになってございます。

最後に8ページですけれども、これはIAEAから公表されております平成18年末における各国のプルトニウムの保有量を整理したもの、これを参考までにお示ししてございます。

非常に簡単ではございますが、昨年末での我が国のプルトニウムの管理状況については以上でございます。

(近藤委員長) ありがとうございます。

それでは、御質疑をお願いいたします。

どうぞ。

(広瀬委員) 質問ですが、これは誰が書いたものですか。

(千葉補佐) 再処理施設にございますプルトニウム量につきましては、それぞれの事業者からヒアリングをしてまとめた数字になってございます。加工施設につきましても、これも加工

事業者、プルトニウムを使っているのは原研だけですので、原研からお伺いした数字になってございます。それから、各発電施設等にごございます数字につきましてはそれぞれの原子炉を持っている事業者からヒアリングをして整理した数字になってございます。

(広瀬委員) つまり、全部自己申告ということですね。

(千葉補佐) そうということです。それから、2ページの(2)にあります海外で保管されている量ですけれども、これにつきましては英国とフランスの再処理事業者のほうから電力会社等を通じて聴取した数字になってございます。

(近藤委員長) 私の怠慢かもしれません。今日の報告については、あらかじめ少し背景説明をすることをお願いするべきでした。いまの報告は例年通りの報告ですということで説明を始められたけれども、今年から今ご指摘の点に関わることでもあるのですが、変わっているのです。このこと、議事録にとどめたほうがいいと思いますので、事務局は御説明ください。

(千葉補佐) 了解しました。昨年までは、内閣府と経済産業省と文部科学省と3省の名前で報告しておりましたが、今年からは内閣府のクレジットで公表することになってございます。

(近藤委員長) この報告に含まれている数値が他の行政活動や民間活動において公表されることがありますから、当然のことながら、それらと整合していなければいけないわけで、その観点からの意見照会はしてとりまとめたのですが、この形には内閣府の責任でとりまとめた、ということですね。

それでは、ほかに。よろしゅうございますか。

では、私からもう少し。4ページにあります在庫差、MUFというのはしばしば注目される量なので、丁寧に説明がなされた方がいいと思って申し上げますのですが、一つは日本原子力研究開発機構の再処理施設のMUFについては、昨年に比べ今年の数字が大きくなっているのではないかとと思うんですけれども、その理由。

もう一つは、MUFの定義が5ページに書いてありますけれども、この文章、「帳簿上の在庫量」と実際の測定で確定される「実在庫量」との差だから、前者引く後方で計算するもので、これは国際社会の常識にあっているのですが、これは実在庫が「帳簿上の在庫量」に届かない程度を表わしていて正になることが多く、それが大きいと心配という人が出てくるという性格の量ですが、六カ所ではこれが負になっていてほんとにかいなと思うし、東海ではこれが正で六カ所よりも大きいことが気になって、数字を追っていったわかったのですが、ここでは、計算は逆に実在庫から帳簿在庫を引いているのですね。

(千葉補佐) はい。

(近藤委員長) これは、定義上は説明がつかない量として最後に示す量なのに、この表では内訳の一つに掲げているから、符号を逆にしないとイケなくてそうしているのですね。何

(千葉補佐) はい、おっしゃるとおりでございます。

(近藤委員長) 符号の問題はそういうこととして、つぎに、それが去年よりかなり大きくなっている理由は何かという。

(千葉補佐) それにつきましては、平成19年末、5.3kgの数字の中身は、過去に発生いたしました低放射性固体廃棄物、これ要は当時計量することが困難であったので計量してなかったのですが、これに入っています核燃料物質の測定を実施しまして、新たにプルトニウムの在庫として4.2kgを計上するということになりまして、今年はその分、増えたということです。

(近藤委員長) なるほど。我々がこうやって公表を求めているのは、趣旨にありますように透明性を上げる観点からですから、ちょっと専門家が見ると奇異に感じるころは、きちんと説明した方がいいですね。は

(田中委員長代理) 今の委員長の説明ですと、5ページの在庫とMUFのこの説明、注意書きとは少し違いますね。

(近藤委員長) そうですね、どうしましょうかね。定義をふつうのものしておいて、数字は逆転させて表示させていますというか、MUFとはいわないか。

(伊藤委員) あるいは今回こういうことだったと説明をつけたほうが良いですね。

(近藤委員長) これは翻訳して国際社会に公表するわけだから、誤解のないようにしないといけないから、注に工夫をしましょうか。

(千葉補佐) はい。

(近藤委員長) 本来、事前に私どもが十分にチェックして、そのところを整理しておけば良かったので、至らぬところがありましたこと、お詫びします。ほかに何か。どうぞ。

(松田委員) 委員長がおっしゃることに賛成です。国民への情報公開をやっているわけですが、それが国民に分かりにくいということだとか海外に誤解を与えかねないということであれば、来年度からもっと分かりやすくしていこうと。

(近藤委員長) はい。

それでは、そういうことを含めてこの報告は御了承いただいたことにしたいと思います、よろしゅうございますか。

はい。ありがとうございました。

それでは、次の議題。

(2) アジア原子力協力フォーラム (F N C A) 第2回アジアの原子力発電分野における協力に関する検討パネルの結果について

(土橋参事官) 二つ目の議題ですが、F N C Aの第2回アジアの原子力発電分野における協力に関する検討パネルの開催結果について、横尾補佐より御説明したいと思います。

(横尾補佐) では、お手元の資料第2号によりまして御報告させていただきます。

F N C Aアジアの原子力発電分野における協力に関する検討パネル、この第2回会合の結果です。

資料の1ページ目に概要をまとめさせていただいております。この会合は、原子力委員会主催、原子力安全委員会後援により、9月1日～2日、三田共用会議所で実施しました。

パネル議長を早田原子力安全委員会委員にお願いして、F N C A参加10カ国のうち、バングラデシュ、中国、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、フィリピン、タイ、ベトナムの9カ国から原子力政策、原子力安全規制に関わる上級行政官、そして有識者に参加いただきました。また、I A E Aからも出席をいただきました。

議論のテーマは、「原子力発電にかかわる安全確保のための基盤整備について」です。議論の結果としまして、安全確保のための基盤整備を効果的かつ効率よく行うには、国際協力の推進が有効という認識のもとに、F N C A参加国間での知見と経験の共有を進めるべきということ。そして、国際原子力機関のアジア原子力安全ネットワーク (A N S N)、それから東南アジア諸国連合+日本、中国、韓国で進めている原子力安全サブネットワーク等の他の国際枠組み等との連携を促進していく必要があるということが提言されました。

2ページ目からは会議の内容をまとめております。

(1) 開会セッションに続きまして、(2) セッション2では、各国の状況が報告されました。

①バングラデシュからは、2020年までに中小型炉の建設を計画している。原子力推進と原子力安全規制の両方を今バングラデシュ原子力安全委員会が担当している。今は原子力発電にかかわる基本的な安全規制の基盤整備を進めている状況にあるということ。

②中国は、現在11基、9GW eが運転中で、8基が建設中。2020年にはこれを40

GWeまで増加するという計画。原子力安全規制は、環境保護省に置かれています国家核安全局が担当しており、大幅な増設に向けて人材育成等さらなる基盤の拡充を進めているということです。

③インドネシアですが、国家原子力プログラムに基づいて、2016年または17年に最初の原子力発電所を運転したいということです。原子力に関しては、原子力推進の原子力庁と、それから安全規制を行う原子力規制庁があるということです。今緊急時対応や規格基準の拡充等の基盤の強化を進めているということです。

④日本ですが、現在55基、約50GWeが運転中であり、総発電量の25.4%、2007年は若干少なかったんですが、を占めている。安全規制は原子力安全委員会が全体を管轄し、商用炉については原子力安全・保安院、研究炉は文部科学省が担当しているということです。

⑤韓国ですが、現在20基、約18GWeが運転中である。現在6基が建設中で2基が計画中である。さらに、2030年には電力の60%をまかなうぐらいまで増設したいということです。原子力の安全規制については、教育科学省の中の韓国原子力委員会が基本方針を決定して、その担当部局がその規制を実施しているということです。さらにサポート機関として、韓国原子力安全技術院があるということです。

⑥マレーシアですが、現在は原子力発電の導入の計画はない。ただし、国内でのエネルギー資源の減少を考慮していて、2020年以降には必要になるのではないかと検討を進めているということでした。それに向けて実際にマレーシア原子力庁等の機関、組織が立ち上がっているということです。

⑦フィリピンですが、ここも現在は原子力発電の導入計画はないです。ただし、過去には1970年代から計画を進めておまして、実際にバターン原子力発電所というものが建設、ほぼ完成されているわけですが、中止されていると。

(近藤委員長) これは600MWeですね。

(横尾補佐) ああ、すみません。60万キロワット、600MWeです。すみません。

現在長期的なオプションとしては原子力発電がいるのではないかと検討が進んでいるということとして、この既存の施設の再利用を含めて検討を進めるということです。

⑧タイですが、昨年度策定の電源開発計画で、2020年に導入を決めております。今後実際にそれを進めるかどうかは2011年までに閣議で判断するというということです。それに向けては、タイ原子力委員会とそれから科学技術省の中の組織が仕事を進めていると。

⑨番目はベトナムですが、2020年に2GW、さらに2025年までにはさらに2GWを追加するという計画が政府によって承認されております。原子力安全規制は科学技術省の中のベトナム放射線安全・原子力安全規制庁が担当するというので、法、規格の整備等を現在鋭意進めておるということです。

以上が各国からの報告でした。

次に4ページ目、(3)セッション3としまして、「安全確保のための基盤整備に関する講演」ということで、実際に経験がある国々から四つ講演をいただきました。一つ目が日本。これは原子力安全・保安院からその活動の概要、インフラの強化等の動向が紹介されました。最近ではIAEAの国際規制レビューサービスの受け入れ、新潟県中越沖地震の柏崎刈羽原子力発電所への影響、耐震安全性の見直し等について紹介されました。

2番目は中国からでして、中国では複数の国からプラントを輸入しておりまして、その点の特徴である。それを克服するべく基盤を充実しているということでありました。また、強調されていたのは、一番最後から2行ですが、「国民の意見を十分に聴取して、民主的な意思決定に基づいて発電所の建設を進めている」ということです。

3番目は韓国から、これはサポート機関である韓国原子力安全技術院の発表でした。この中で特筆すべきは、国際原子力安全学校(INS S)というものを設置されておりまして、関連する法体系とかそういったことを国内及び海外の研修生を受け入れて教育しているということでした。

最後に、IAEAから講演がありました。まず、原子力発電の導入について、導入には15年ぐらいかかるけれども、実際に発電所の全体の期間としては100年間にわたるコミットメントであって、安全確保の責任はそれを行う各国にあるということを前置きとしまして、その次に、①から、これ④が二つありますので、最後は⑤ですね。①のマイルストーン文書等の発行、②として国際的な標準作成、③としてレビュー、④が教材や教育コースの提供、そして⑤は先ほど申しましたANSN等を進めているということが紹介されました。

5ページ目ですが、このANSNではITネットワークが既にできているので、FNCAと連携して情報交換に使うということも提案されました。

(4)セッション4ですが、これらを受けまして、円卓会議を行い、安全確保の基盤整備の協力に関して討議しました。リードスピーチに続きまして、以下に挙げた4点の意見が出ました。

- ・基盤整備の中でも特に法体系とか能力、テクニカルコンピタンスの開発を含む人材育成、



広聴・広報への支援が期待されると。

- ・実際に発電を行っている国々とこれから行う国々での情報、経験の共有が必要であって、セミナーやワークショップが有効である。
- ・ＩＡＥＡのガイドラインというのは役に立っているが、さらに定量的な指標というのがあればみずからの達成度を測れるようになる。
- ・ＡＮＳＮやＡＳＥＡＮ等の連携が効果的。

(５) セッション５は、昨年度のパネル会合の結果を受けて進めている人材育成プログラム情報データベースの開発についての報告でした。これは、ＦＮＣＡ参加国間で実施中の人材育成プログラムの仕様と内容を集めるというもので、ＦＮＣＡのウェブサイトで、オンラインで利用するという事です。実際このようなものは初めてなので、活用していきたいという意見が多数出ました。

６ページ目ですが、(６) セッション６、この会合の結果を受けて、１１月に予定されているＦＮＣＡの大臣級会合へどう報告するかということが議論されまして、まずは最初に挙げました２点、セミナーやワークショップを通じて情報や経験を交換すべき。それから、ＦＮＣＡと他の国際協力の枠組みと連携すべきという点が挙げられました。こういうことを踏まえて、ＦＮＣＡとしてそれらを進めていくことが報告の内容としてまとめられました。

(７) セッション７、これは今までのものと少し変わりがして、来年度以降のこのパネルの活動について議論しました。パネル会合としては、第１フェーズとして２００４年～６年、第２フェーズとして２００７年～８年に進めてきたわけですが、これらの結果として、昨年度大臣級会合での「持続的発展に向けた原子力エネルギーの平和利用に関する共同コミュニケ」の発出であるとか、先ほど申しましたデータベース開発等の成果が出ています。これを受けまして、第３フェーズをやることが提案されました。目的は、原子力発電の基盤整備にかかわる取組の実際の経験を担当する上級行政官や有識者で共有しようと。各国の取組、それから国際協力を進めていく上で役に立てようということです。タイトルは、「原子力発電のための基盤整備に向けた検討パネル」であります。これを進めようということで了解が得られました。検討としては、この実際的なテーマであるとか、開催頻度であるとかも一通り議論されまして、しかしこれらについてはさらに詰めていくこととなりました。

最後に、セッション８の閉会セッションでは、早田パネル議長より、この議論の報告がまとめられまして、今後の予定としまして、１１月に大臣級会合を開くこと等が連絡され、最後に田中原子力委員会委員長代理より閉会あいさつが行われて、会議を終了しました。

以上でございます。

(近藤委員長) ありがとうございます。

それでは、ただいまのご報告について御質疑をお願いいたします。

松田委員。

(松田委員) 洞爺湖サミットで行われました宣言の中に、3 S の国際イニシアチブが日本の提案に係るものとして出てきているわけですから、ここでは、そういうことが見えるようになっていませんが、F N C Aにおきましても大臣会合に向けてこれから検討されていく際には、趣旨等において3 S を掲げていくのがよいと思います。

参加してみて、各国の動きが目の前で具体的に発表されたので、非常に興味深く聞くことができました。こういうことを根付かせていただいたこれまでの事務局及び関係者の御努力に感謝です

以上です。

(近藤委員長) 広瀬委員。

(広瀬委員) 感想ですけれども、昨年と今年と続けて出席いたしましたが、今年は原子力安全委員会の早田委員がパネル議長を務められたということで、これは活動を広げる上では大変大きかったと思います。

それから、去年までですと、中国とか韓国が余り積極的ではない印象を受けたのですが、今年は非常に積極的に関与してきたのが大変印象的で、良かったと思います。

また、こういう新しい組織が活動していくときに、既にある他の組織とのオーバラップが常に問題になるわけですが、その点について今年は非常に配慮があったと思います。例えばデータなども、どのように共有するかとか、それから I A E A の枠組みをどう使うかとか、そういったことが非常に綿密に話されて、これを今後さらに進めていく上ではプラグマティックな話が行われて大変よかったと思いました。

以上です。

(近藤委員長) ありがとうございます。

田中委員。

(田中委員長代理) 私も会議に全部参加させていただきました。昨年からいわゆる原子力発電に関するテーマを取り上げてこの F N C A が始まったということですね。今回は安全についての議論を中心にということでした。その前提として、今回9カ国ですけれども、実際には原子力発電所の導入のレベルが、それぞれ三つぐらいに分かれていて、日本と中国と韓国は

既に原子力を利用して、これから10年以内ぐらいにベトナムとタイとインドネシアが原子力を導入しようとしている。バングラデシュはかなり躍進的なことを言っていましたので、若干割り引いて聞かなきゃいけないのかなというところがありましたけれども、フィリピンとバングラデシュとマレーシアは少し長期的に原子力の導入に取り組んでいくという。

こういった枠組みですが、どんな形にしる大事なことは、レベルというか経験が違うところの先陣、先頭を走っている3カ国もそれぞれ、原子力についていろいろな安全の課題を抱えていて、そういったものを次の人たちにうまく共有できる枠組みを続けることが大事だと思っています。環境問題とかエネルギー問題だったらすぐに原子力発電所がボンボン作れるかということ、そういう状況にはないということが確認できましたし。

逆に、そういうところにも強い意欲があるので、それをうまく近隣諸国でサポートしていく、そんな枠組みを継続的に作っていったらいいなと。その第一歩を踏み出したのかなという感じをしています。

(近藤委員長) ありがとうございます。

私は最初しか出席しませんでしたから、余り辛口なことを言っちゃいけないのかもしれないけれども、今回の集まりはテーマに係る円卓討議が主の集まりでしたから、開会の辞で申し上げたこの円卓討議のミッションが果たされたのかという点が気になります。この円卓討議はジャストトーキングのためだけではない。それも一つのミッション、つまり様々なレベルの国の方が顔を合わせて自分の立場なり考えを意見交換するということは大事なことから、この場の使命の一つはそれであるのかなとは思いますが、私どもがこの会合を設計した際には、円卓協議で議論して、何かプロダクトを得たいとしていたのです。この観点から見ると、いろいろ連携したほうが大事だとかという指摘についていえば、それは実はRCAでもFNCAとの関係をどうするかという議論をもう5年来ずっと議論をしている。私としては、FNCAのコアアクティビティはやはり研究プロジェクトと考えるものですから、こういう議論を通じて、こういうプロジェクトを立てようということを決めるのがパネルの仕事じゃないかと思って、そのように申し上げたつもりです。そこで、この議事概要のどこにそれを読み取れるのかなとさっきから考えていたのですが、なかなか読み取りにくいですね。何かFNCAのプロジェクトとかワークショップを定期的 to開催するという提言を読み取りたい。集まって議論してほかのものといろいろ連携するのが大事だというコンクルージョンだけでは困るという感じを持っています。

IAEAのRCAがあるにもかかわらず、日本はなぜFNCAをやっているか。これは日

本としては、インドとはこういう活動を共同したくないということで、ほとんど同じメンバー構成ですが、インドをはずすためにこういう独自のグループを作って活動してきているわけですが、皆さんお気づきのように国際社会はＩＡＥＡも含めてインドとのつきあい方が日本とは違うし、しかもこれをもっと強化していく方向に変えていく状況にありますから、ＦＮＣＡが意味ある付加価値を生み出すことができないと、存在感が希薄になる、そういう点でチッピングポイントに立っている、そういう危機感を持つことも大事だと思うのです。

そういう意味で、私としては何か、たとえば、この地域には独特の文化、オリエンタルカルチャーがある、その一つとして、知識なり、情報なりの伝達手段としてはフェーストゥーフェースコミュニケーションが非常に重要であるという点がある。そういうことを踏まえて、ＦＮＣＡだからこそファンクションするプロジェクト、特定テーマのワークショップでもいいのかもしれないけれども、そういうものを是非行っていただきたいと考えています。

このワーディングから、それこそアジア的に読めば、読めないことはないと思いつつ、またパネルやりますと言うのも良いけれども、現場の実務者が一番重要なので、重要なことについて実務者の対話の機会を作ることを是非やっていただきたい。この行間から、無理してもそういうものを読みとりたいと思っています。

(横尾補佐) 御指摘ありがとうございます。実際に事務局でいろいろ案を考えたときにも、もう一歩進まないといけないなということで、例えばこの安全分野については、先進国でやっているインターナショナルニュークリアレギュレーターズアソシエーション、これのアジア版をやると違う趣があるとかそういう話もありました。パネルの場でもそういった考えからワークショップ等いろいろ具体的な話は出ました。ただ、いかんせん日本も各国も予算等がつかないと実際できないということで、この結論についてはこの段階ではディスカッションの中身はあったのですが、ここの公に出してない。先生のおっしゃるように、行間にとどめまして、できるようになったら是非書きたいと。

(近藤委員長) そういうことですか。

(横尾補佐) はい。できるようになったら晴れて書きたいということでございます。

(広瀬委員) 委員長はいなかったから分からないのですよね。

(近藤委員長) そう、だから質問しているのです。でも、それなら結構です。期待しています。他に、はい、伊藤委員。

(伊藤委員) 私も今年は参加できなかったのですが、今年状況は今の御報告からしか知ることができないのですが、私もこのＦＮＣＡの意義というのは何だろうかと思います。これからイ

ンドにしる、今具体的に計画持っているベトナムあるいはインドネシアにしる、話が具体的に  
なればなるほど、だんだんとバイの関係になりながら計画が進められ、より商業レベルの  
話になっていくと。

このF N C Aの意義というのは、いろいろなレベルの国、まだ研究、放射線利用のレベル  
にとどまっている国から、現に原子力をガンガン使っている国までの中で、原子力の安全あ  
るいはセキュリティ、核不拡散、平和利用とそういうものをどうバランスをとっていくかと  
いう非常に大きな問題があります。それについては先進国が辿ってきた道があり、これから  
新しくやろうとしている国も辿ってくる道ですから、そういう中でのお互いに経験をシェア  
し合いながら、先進国はそれに対して積極的に貢献していくべきであると。それから、これ  
からやろうとしている国はそこから学びながらできるだけ効率的・効果的にやっていくと。  
やはりそういう面で効果は期待できると思います。

マルチでやっている、いろいろなレベルの国がある中で、どういう効果を狙っていくの  
は、先ほど委員長が言われたことに対して一つ答えになるかなと。だから、漫然とやるので  
はなく、フレームの中でやっていることを意識してやっていくことが、効果が上がる一つ  
の方策かと思います。全部がそれでいいとは申し上げませんが、そんな印象で見ているつも  
りです。

(田中委員長代理) 一つよろしいですか。委員長言ったとおりのことなのかもしれませんけれ  
ども、昨年のパネル、大臣級会合も含めてC D Mについての共通認識を得たし、3 Sについ  
ての共通認識も得て、国際的に発信できたというのはあります。今回も安全という切り口で  
すけれども、全体として原子力発電についてお互いにそれぞれのレベルで学んでいるのでは  
ないかと。

これだけの格差がある中で共通の細かい議論はなかなかできないので、このF N C Aとい  
う若干大きくりのところで少しリードをしながら、場合によってはその中にバイができたり、  
もう少し大きな枠組みを作ったりしながら、お金ができたをもっと具体的に実務者レベルの  
議論と、委員長おっしゃるような次の段階にいくのかなと。当面の役割としては、F N C A  
はそんな役割なのかなと思います。いずれ時期がきたら整理してもいいのかもしれませんが、  
まだもう少し続けてもいいような気がいたします。

(近藤委員長) F N C Aは、この会合だけじゃなくて、プロジェクトがあると。F N C Aの意  
味の8割方はその十何個のプロジェクトなのですよね。このパネルはむしろ最近の数年間に  
作ったもので、その意図は、変化していく環境のなかで何か新しいプロジェクトを生み出す

べきはないかと考えて、それを生み出す仕組みとして、そういうミッション、ファンクションを持って考えたとは私は整理しています。タイトルもまた基盤整備の協力に関するパネルとなっていますでしょう、何か協力プロジェクトを考えられないかということをもミッションと了解していたということで、あえて申し上げたわけです。

(横尾補佐) その点で、若干宣伝になりますが。まずF N C Aのプロジェクトというのは基本的にイコールベースで実際にできることをやろうと、放射線利用ということをも主にやってきたということです。

ただ、各国で原子力発電非常に興味が高まっているので、これも取り上げようと。これは非常にマルチですので、放射線利用と同じ方向性のプロジェクトは立ち上がるのは難しいと。これも何年かパネルで検討してきた結果、分かってきたことです。先ほど伊藤先生がおっしゃられた、そういうマルチの中で何ができるかということです。そういう共通認識をしゃべることがありました。

5 ページ目の一番下のパラグラフですけれども、そういう中で出てきたのが人材育成プログラム情報データベースの話です。実際、既にレベルに応じたプログラムがものすごくたくさんある。ところが、実際これ話をしていると皆さん認識がない。何がどこにあるかすら把握できていない。自分が何に向いているかも分からない。ということで、このデータベースを作ろうということになりました。

5 ページの最後のパラグラフにあるんですが、実際にこのパネルで具体的に手が動く、初めての成果だったということで参加者は非常にある意味でエキサイトしていました。

それから、I A E Aからもあったのですが、こういうデータベースはA N S Nとかほかの枠組みでも実は作られていないと、マルチの協力の入口の手前になるんですが、それすらなかったと。そこから始めようということが分かったというのは非常に大きなことのひとつであったと思います。

若干宣伝めきますが、そういうことです。

(近藤委員長) 二つめのコメントになりますが、このデータベースを作るのも、人材育成のあり方に関するパネル、ヒューマンリソースデベロップメントに関する協力ということでパネルをやって、その結果として生まれたのです。で、セッション5の最後のところ、「さらに」まではいいんだけど、次の、一例として、安全規制の法体系、ここまで言っちゃうと、これはヒューマンリソースの情報データベースの話からはみ出した議論ですね。私はこの各国の安全規制のデータベースを作るという提案は、むしろ上の基盤整備の協力の一環と

して記載されるべきと思います。これはヨーロッパでENRAというヨーロッパの規制者の会合ですでにそういうものの第一版ができているのですが、自分の国はここが空白だということが分かって非常にいいと、で、それをベースにさらに協力が深まる、多様化することができる。先回りして言いますと、ヨーロッパの場合には、これである種ユニバーサル、統一的なものにしようという魂胆があるのですけれども、アジアはそういう方向性を持ち得るのかどうか、これは分からないけれども、こういうものを作ることは、私は賛成です。それは上の（４）のテーマになって書かれていたほうがすっきりするなと思いました。しかし、議論されたことは大変結構だと思います。

いずれにしても、１０年がかりの仕事となるわけで、今日決めて明日何かできるということではないのですから、議論を踏まえて、１０年を見越したプロジェクトを考えていくということが一番私としては重要なことだと思っています。

大変活発な議論がされたということで、早田さんのチェアマンシップが、彼は日本語より英語のほうが早口でしゃべる悪い癖があるのだけれども。（笑）非常によかったのかなと思います。事務局には御苦勞様でした。ありがとうございます。

それでは、この議題は終わります。

そういたしますと、次の議題。

### （３）その他

（近藤委員長）その他議題、何かありますか。

（土橋参事官）事務局のほうは特にございません。

（近藤委員長）各委員、何か。では、終わってよろしいですか。

それでは、次回の予定を伺って、今日はこれで終わります。

（土橋参事官）それでは、次回の予定日程を御説明します。次回、４０回の定例会議は、来週９月１６日、１０時半から、場所は本日と同じこの場所で予定してございます。よろしくお願いいたします。

（近藤委員長）それでは、これで終わります。

—了—